

彼岸のかまきり



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

であった。

私は、このかまきりは亡くなって十年たつ夫ではないだろうかと思つた。

知らぬ間に厨に住めるかまきり蟻螂は夫に似ており

その怒る様

という歌をかつて詠んだことを思い出したからである。夫は平成十七年二月彼岸に渡つてから、次々にいろいろなことがあつた。

亡くなる迄、孫の結婚を心配していたが、自分のお葬式のお通夜の日に、誰か若い男性に留守番をたのみたいという、孫のボーイフレンドの一人が来てくれることになった。

そしてその後、彼と交流が深まり、一年後に結婚したのである。多分夫が選んだのかもしれない。死者の力をひそかに感じたのは私だけではなかった。数年後可愛い男の曾孫が誕生したのである。夫がいたら、どんなに喜んだことだろう。

彼は写真のじいじが誰かと知る由も

捉えて庭の草むらに放してやった。
私は小学校の読本にあつたかまきりの歌を思い出した。

「かまきりじいさん 稲刈りに

鎌をかついであぜみちを

遠い田んぼへ急ぎます

すつきり晴れた秋の日に

遠い田んぼへ急ぎます」

かまきりは当時どこにでもいたし、

野原が方々にあつて昆虫は親しい仲間

つい先頃、夜の戸を締めに行った娘が、「わあ怖い」と戻ってきた。「どうしたの」と聞くと「カーテンにかまきりがある」と言う。かまきりが怖いとは、と私は戦争で空から爆弾が落ちる中生きてきたのに、平和で育った者はかまきりが怖いなんてと笑ってしまつた。

そばにゆくと、褐色の中位のかまきりが首を動かして止まっている。娘は孫を呼んで外に放してやるといふ。孫は大きな捕虫網をもつてきて、上手に

ないが朝夕私が香をたき般若心経を唱えるのを見ながら、大きくなつた。仏様のお鈴が大好きで鳴らしすぎて「じいじがうるさいよって言つてる」と言う止めるようになった。

その間私は貧血がひどくて、一時は娘たちが必死で介護してくれた。大病院に見放された後インターネットで探した新しい先生は月二回家に来て下さり、思いがけず貧血から立ち直ることができた。

ベッドの上の写真の夫は、じつと見守ってくれていたのだろう。様子を見るにカーテンにとんできたのだろうと私は感じたのだ。

又末娘の家の三人の孫たち、長男の家の二人の孫も順調に育ち、それぞれが羨ましいのは何より有難いことで、特に私は自分の力で一人で生きていくという実感は全くなく、今は生かしてしまつていく生命と思つて毎日をすごしている。

カーテンのさわぎから数日たつて、今度はベッドの私の枕の上に、かまき

りがひよつこり止まつていたのだ。

どこから入つたのか、網戸だらけの家ですき間など全くないのに、私が朝の光を浴びるため、戸を開けてしばらく経つて庭を眺めていたときに、セーターか何かについてきたとしか考えられない。

昆虫に宿る死者の魂はどこへでも自在なのだろうか。

毎日庭に飛んで来た黄色い蝶の二匹も十日の間毎日遊びにきて、私が庭に立つても少しも逃げず腕などに触れてひらひらととんでいることもあつた。

庭に夏みかんの木があるから、そこで育つたのかも知れない。

紋白蝶ではなく紋黄蝶の可愛い二匹で時に翅を触れ合つていた。

庭に棲むものを、娘も孫もとても大事にしていて、怖いかまきりも殺したりは絶対しない。又蛙が方々にかくれていて、雨が降るとのっそりと敷石の上に出てくる。

「危ないからどいて」と言つても動かない。

もう何代目の蛙なのだろう。

庭隅の小さい瓶の水に育つらしい。時に、かすかに鳴き声がすると、娘は喜んでゐる。

今日は食卓のそばで、蠅が一匹仰向けになつて手足をふるわせていた。娘は「まだ生きてゐるからそつとしとしてね」と言う。

「昨日の夜とび廻つていたのよ」などと云つて、「外に放した方がいいよ」と言う私に大きい団扇をもつてきてそつと掬い上げて、やつと草むらに放した。

そういえば梨園の話に蠅になつた役者がいて舞台でより目を作る孫の鼻に止まつたということは何かで読んだ。

海外公演までついていって、部屋をとび廻り、お嫁さんが「あらお義父さま」と言つたという。

芸人はそれぐらいのことをするのもかもしれない。娘も、「たいたい殺したりはだめよ誰かの魂かもしれないから」と私をさとすようにつぶやくのである。

父の遺産



宮地 智子
(詩人)

明治三十八年生まれた父が亡くなつたのが平成二年である。かれこれ四半世紀が経つた今日になって、私は父の

残した蔵書を整理し始めた。そのうちのいくつかが埃をかぶつて、長野県北佐久郡に所在する古い山小屋に残っている。それはかつて父が電気も水道も引かずにおいた粗末な堀立小屋である。

まず初めに手に取った本には、カレンダーか何かと思われる紙をちぎったような紙きれが挟まれてあった。そこには、決して上手とは言えない父の筆跡で短いメモが書かれてあった。

〈昭和十五年一月十五日 近衛混成旅団の一兵卒であった照太は嶺のつく子の生れるのを念じつつ前線に向つた
二月一日苦戦の結果賓陽に入った

やれやれ生きられたと感じた時は二月下旬であった 苦しい戦であった

※一 父の名

※二 父は当時、母のお腹のなかにいた子の名を、自分の父親の名〈嶺巖〉から一字を取っていくつか言い残して出征したものだと思われる。

そのメモが挟まれていた本とは、昭和三十五年 自由アジア社刊 今村均著『今村均大将回想録』全四巻のうち、第四巻『戦い終る』である。汚れを拭い、和紙で繕い、第四巻から読み始めた私は、その筆緻の確かさ、公明正大さ、人間に対する愛情の深さに、心を打たれ、たちまち引き込まれた。父が参戦した何寧作戦は、前半苦戦が

続き、桜田少将を長とする、増援軍としての近衛歩兵旅団の一員として、途中から参加したのである。これを機に日本軍は勢いを盛り返し、この時点で勝利を治めている。父と直接に関わりのある南寧作戦の部分は、回想録中のほんの僅かであり、それはそれで私個人としての感慨は大きいものであるが、それにも増してひとりの日本人として私が関心を抱かざるを得ないエピソードが至るところに散見されるのを目を見張るばかりである。

例えば、敵は自分の軍の戦死者の遺体を放置したまま退却するので、もしこの遺棄死体を外国の新聞記者などに見られるといかにも残忍に見え、悪宣伝に供されるだろうからはやく埋葬す

るようにと今村師団長（当時はまだ大将ではなく師団長であった）は命令を下している。敵味方菩提の碑を清正公の故事にならい、南寧公園に建設するという計画は、安藤軍司令官が発言している。

なる程、南京大虐殺などというデマがまかり通るのも故なしとしない、ひとつのよい資料となるのではないだろうか。もうひとつ（慰安所）という項目にも注目すべき内容が書かれている。

新任の久納中將軍司令官は、就任の披露を兼ねて今村師団長と桜田近衛旅団長を主賓として軍の幕僚各部長ら総勢二十名くらいを夕食に招いた。その雑談のなかで、軍の管理部長が次のように言います。「きょう自動車で十五名ほどの抱え主につれられ、百五十名の慰安婦が到着し、軍管理部で、家屋の都合はつけました。全部を南寧に留めておいてよいか近衛部隊は南寧から八軒も離れた部落におりますので、そちらには何名程移せたらよいか、

ご決定を願ひ、その方の設備は桜田旅団でやっていただきたいと存じます。」

現在、大問題となっている、いわゆる従軍慰安婦に関わる重要な事実が確認できるという点で特筆すべき箇所なので、もう少し引用したい。（慰安所というのは、将兵の性的慰安のためのものであり、わが国内では、戦地のこの種施設をひんしゆくする人が多い。これはわが軍だけのことではなく、列国軍とともに「特殊看護婦隊」の名でやっているとのこと。私もこの名の方がよいと思う。）

以上引用した、ひとつの会話と、ひとつの文章から、もともと従軍慰安婦などというものは存在しなかったことがわかるし、戦場に於けるこの種の施設は、日本にだけ見られる特殊な存在ではないこと、ひとつの証として貴重な資料であると思う。また、こんなユーモラスなエピソードもある。

ある日、憲兵隊が、南寧慰安所の利用状況を一表にして各隊に配布したところ、当初、近衛旅団は他と違ってい

るから慰安所は必要ないと言っていたのが、予想に反して近衛部隊のものが一番多かつたということ。あるいは今村師団では、若い者の利用がないのは、一枚の切符で三十分利用できるその切符を、将校や下士官が一日に何枚も利用するので兵隊たちが長時間待たされそのうち足が遠のいてしまったということ。紙幅が尽きてしまった。最後に、敗戦の夜、今村大将が別辞として述べた一部を紹介したい。

（私は思う。人間は運命、すなわち四囲の環境による影響から脱れることは出来ない。同様に国家もまた運命作用から自由であり得ない。後世の歴史家は満州事変以来の、わが日本の歩みを、さまざまに批判するであろう。

が、私は、これを民族的宿命と信じている。死中に活を得ようとして起ったこの戦争も、事成らずして敗れた終戦も、また運命であると考え。運命に對し、もつとも平静でありかつ勇敢であるのは昨日までの敵漢民族です……）

稚内・旭川、そして合掌



志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}

(文芸評論家)

北海道の稚内に眠る長姉の墓参に出かけた。姉が他界したとき、私は他用で葬儀に出席できなかった。寺の納骨堂には姉の夫と息子も眠っている。寺庭は綺麗に整備され、藤の花が美しく咲いていた。線香を立てて合掌し、葬儀に参列できなかったことを心から詫びた。

姉が住んでいた家のあたりを散策した。家は昔のままに残っているが、近くの市営住宅は人が住んでおらず、まるで廢墟と化し、鹿が三頭、こちらを睨んでいた。鹿からすると、この地の

あるじは自分たちで、私は怪しげな潜入者なのであろう。

海辺に出てみると、遥かに海上に浮かぶ利尻富士が哀しく見える。姉から貰ったチケットで近くの温泉(民宿)に行ったことを思い出す。しかし、それも何故か哀しい。稚内の町を歩くと、駅の近くにあった本屋が姿を消していた。稚内に来ると、必ず立ち寄り、雑誌などを買い求めていたことを思い出す。

私は年に一、二度、旭川へ出向く。ここに住んでいた末姉が他界し、家の

整備で出かける。隣の家の方に庭木が出ていれば、それを切る。南の公道に庭木が出ているとそれも切る。草筆りもする。成長した蕎麦や蕪は根元から抜いてしまう。

北海道は湿度がないので、気温が高くてもさほど暑いとは感じない。ドアを開け放つて玄関に座り、東側の窓から吹き抜ける爽やかな風に、五月から十月くらいまでここに住もうか、などと思ったりする。旭川には年に一、二度しか行かないのに、近所の青木さん、亀井さん、神沢さん、小谷さん、みんな心優しく、親切にしてくれる。こうしたことも、旭川に住もうかという気を起こさせる。亀井さんの隣の菱谷良一さんは北海道屈指の画家である。もう何年前のことだが、通り掛かった菱谷さんが、家の前にぼんやりと座っている私に、「個展が今日終わった」と言いながら、「物書きが同じ町内にいると思うと心強い」と話し掛けてきた。「同じ町内」という言葉に、私は心底嬉しさを感じた。

旭川では自転車に乗って大型スーパーに出かける。そのスーパー近くに作家の三浦綾子が住んでいた。以前、三浦綾子記念文学館で夫君の光世さんと出会ったことを思い出す。三浦邸の庭の美しい花が目映り、三浦夫妻の優しい人柄を偲ばせる。三浦記念館で細川ガラシアのコーナーを見ながら、私は〈作家が歴史小説を書き出すのは、現代小説に行き詰まった場合が多い。三浦綾子もそうなのか〉と思った。これは私の謬りで、三浦綾子の場合、すでに『氷点』でガラシアのことに触れているから、キリスト教徒である彼女は、古くからガラシアに関心を抱いていたらしい。

三浦家近くに私の小学校時代からの親友内田征司さんが住んでおり、征司さんのお嬢さんの智子さんは朱彩陶房（陶芸）を開いている。智子さんの造る陶器は色彩といい、形といい、まことに見事な出来栄を示す。奥さんのトミ子さんも温和で優しい心遣いをしてくれる。近くに征司さん一家がいる

ことも、旭川に心惹かれる大きな理由だ。

旭川文学資料館で、副館長の東延江さんと出会った。旭川出身の詩人武田隆子主宰の詩誌「幻視者」や「りんごの木」で〈詩人東延江〉の名前は知っていた。まさか、ここで会うとは思ってもいなかった。東さんが作成した三浦綾子の『隨筆細目』や『旭川詩壇史』は労作だ。武田の晩年の作品に「ふるさと／泪のうえに／泪ながして／悲しく／想う処」という詩がある。私はこの詩が好きで何度心の中で反芻したか分からない。武田は故郷に悲しく思いを馳せながら、望郷の念に耐えられず泣していたのであろう。

最近、北海道上川町にある柳原白蓮の碑のことで北海道新聞旭川支局の楢木野寛記者から取材の電話があった。まもなく、今度は根室支局の丸山格史記者から、やはり白蓮関係の色紙のことで取材の連絡がきた。テレビの「花子とアン」で白蓮は再び大スターとなった感じ。

詩人吉田勉男の菩提寺高徳寺（秩父別町）を訪れてみた。吉田は詩人の加藤愛夫や更科源蔵と親交を持っていた。高徳寺住職金倉泰賢さんの案内で吉田勉男の墓所を拝むことができた。高徳寺は、私の高校二年時の副担任金倉義慧先生ゆかりの寺。義慧先生は詩人小熊秀雄の研究者として知られ、『北の詩人 小熊秀雄と今野大力』は文句なしの名著だ。私は晩年の加藤愛夫と親しかった。人の不思議な縁をしみじみと思う。

高徳寺からの帰途、私の生地である深川に立ち寄り、少年時代を過ごした太子町を散策した。過疎化が進んでいるのか、「売地」の看板が目につき、哀しい思いがする。久しぶりに深川駅前の手打蕎麦処椿に入ってみた。椿食堂は幌加内の蕎麦を手打で食べさせ、味は絶品だ。私が行くと、蕎麦を運びながら、話相手になってくれたお婆さんの姿が見えない。訊くと、三回忌が終わったという。私はここでも心の中で合掌するだけであった。

中学時代

佐川 毅彦



中学生の時、徳子という好きな子がいた。進路指導の先生から、徳子は首里高校を受験すると聞いたので、私は首里高を受けることにした。ところが徳子は那覇高へ私はひとり淋しく首里高へ；遠い昔の忘れてしまった事である。

月日は流れて二年前の夏、お盆前で墓掃除にいった時、小学校からの

友だち^{ツケル}亘と会った。

私の墓の後方に彼の家の墓があった。四十年ぶりの再会である。

その後よく酒を飲んだりするようになった。

私の家の近くの居酒屋で飲んでいた時、中学の話題になった。なんと亘はあの徳子とつき合っていたと言いだしたのである。そして二人で首里高へ通うはずだったと言う。まさか、そんな事があつたなんて、私はどうなるの。しかし彼の成績では首里高はむつかしいのではというので、二人は違う高校へゆくことになった。しかしその後も二人の仲は続いていたのである。徳子が東京の大学にいつている時は文通などをしたり、夏休みで帰った時はよくカルピスをもって亘の家に訪ねて来たという。

ところがある日突然、徳子から葉書がきた。そこには人は変わるものです。これで終わりにしましょうと書いてあつた。どういうワケかわからんまま二人の仲は終つてしまった。

同窓会の時、徳子を見つけた亘は葉書の事を聞いてみたが、ただ泣きただけで真相はわからなかった。

ある時普天間の町を歩いていて偶然出会ったら徳子はびっくりして、あとずさりしながら逃げていった。それから一度も会つた事がないという。

その後風のうわさでは、誰ともつき合わず、いい人もできず、結婚もせず、独身でいるという。

亘は泡盛のロックを飲みながら、やはりオレの事が忘れられずに待っているのか、今からでも遅くない会いにゆくべきだ。泡盛をグイグイ飲みながら、私と一緒に会いにゆこうとかなりしつこく誘う。私は生ビールを飲みながら聞かなかつた事にする。

伏線



志村栄守
(評論家)

今や近隣の外国でも、近代的な高層ビル群が、実は仲は空っぽで無人であるとか、時の流れを感じさせるニュースが目を奪う。

これが私達、人間の人生の変転を見ようでもあり、妙な気持ちになる。

それはまた、最近の子供達をテレビで見ている、つくづく感じてしまう。マイクを向けられて、上手に応答できて頼もしいが、成人した彼等の中には、簡単に人の道を踏みはずす者がいるようで、人生と真摯に向き合うという分野では、成熟する為の機会とか書物には恵まらない時代でもあるらしい。

そもそも人間各人には、若年期、中年期、晩年期とあり、各期毎に秘める運氣に差異があること、これをわきまえるべきなのかも知れない。目の前の状況に右往左往したり、運命を呪ってみたりと、あまりに短絡的に判断し、行動化するパターンを多く見る気がする。

この人生には、実は無意味に終始する。

ることなど何も無い、という意味のことを小林秀雄の著作に見た気がするが、不覚にも何処にあったか失念してしまつたが、確かこうあつた。

「人間、誠意を尽したことで当然、道楽（趣味とか娯楽）の類でも、いったんのめり込んだことでは、いつかは元を取るものだ。」

私事に走ると、若いころから小林の作品に親しんで来て、その間に諸々を学ばせてもらったとのささやかとは言え自負の心が、何処かにあつた。ところが、何度も通過した覚えがある箇所が、突然、脚光を浴びるが如く眼前に迫つて来て、それまで何を讀んでいたのか、とばかり己れの未熟を攻める時は来た。

「こんな事をここに書くのは、先日、W君と本郷（地名）の白十字（喫茶店名）の二階で、取留めのない話をしてゐると、何かの事で大学時代の話になり、君はあの時分、ヴェルティカリテ（垂直性）といふ事をしきりに言つてゐたが、あれはどういふ意

味だ」と突然、尋ねられて、ハタと返答に窮した事を思ひ出したからだ。僕が何やらムニヤムニヤ答へてゐると、彼は笑ひ乍ら、君がヴェルティカリスムで仏文にあげた泥つ埃りは、なかなか鎮まらないよ」といふ意味の事を言つた。（小林「アラン」対戦の思ひ出）

長々と引用してしまつたのは、その先の文言に、若き日の小林の精神が辿つた証跡をあまりに生々しく感得して、その思想のそもその原点、源流をここに見る、そんな強い思いに押されたからだ。

「僕は、なかに、功罪相半ばするさ」と笑つたが、大学生達を眺めて、ヴェルティカリテが一杯だ」と思はざるを得なかつた。僕の心には、無論、侮蔑の念などまるでなかつた。ただ苛立たしさがあつた。誰に向けたらいいか判然としない苛立たしさが。」

「返答に窮した」「ムニヤムニヤ答へる」さらに「苛立たしき」といふ言葉を二度、繰り返しているこの辺りの小

林の内面に、とりわけ深い関心を寄せべきだったのだ、と回顧する時はやつて来た。こんなところにも、大作の『罪と罰』について」とか『私の人生観』での微細にわたる論及にも匹敵する、生きるうえできわめて重要なことが、実はあつたのだ、と。

人生は、意外性だらけと言えなくもないが、小林の著作で、あらためてそれを確認するなんて、と妙な感心の仕方をしてしまつた。と同時に、長い年月、これに気付かなかつたことが損をしたようにも思えた。

さて、ごく普通に、このように言えると思う。上昇志向の強い、明晰な頭脳を持ち主ほど、周囲の雑事をもどかしく思い、自分はもっと先き行きたいのだと言わんばかりに、何かを探索して、とどまることを知らない。

しかし、小林は、真理と過誤を光速にも似て峻別、その世代でただ一人、その後の人生を決定づけるその言葉を我が物としていた、と想像されるから畏しい。古い友人までもが、「あれは

どういふ意味だ？」と、後年に至って質(ただ)したくらい、それは小林だけに深い意味を蔵する言葉であったことは、間違いないと思われる。それが「垂直性」だ。亜流が推測に走ると、天上(≡天井ではない)と足下の現実、この双方への目配りが不可欠であると、小林に言われている気がして来る。

ちなみに小林は、『ドフトエフスキイの時代感覚』を、このように閉じている。

「僕は人間の眼が複雑である事を信じてゐる。謎を見る眼と限界を見る眼と。」

「限界」が人間の異名、別言であることはほぼ常識とすると、「謎」がどんなことを連想させるか、おのずと決まってくる。なお、片言集『手帳』にはこうあるが、私達が想像力に目覚めると、人間知への小径がここには隠れていたのだ、と天を仰ぐ時はやって来る。「批評文の作者は、ある命題が心に浮かぶと同時に、その反対命題が心

に浮かぶくらゐ鋭敏でなくてはならぬ。」

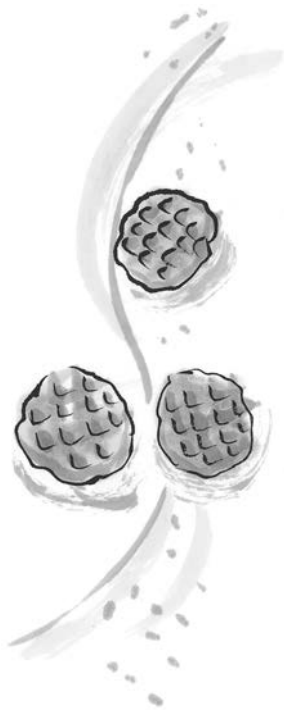
実は、この敷衍は、いづれのヒにか、こんな想像へと誘う。すなわち、「神」からの予兆は、逆転した姿で示されることがある。言葉の先の先に、こんな人生訓があると。

換言すると、物事の成就には、その間に、目の前の状況がそこへ達するための伏線(ここに逆転現象が見られる)であると察知する感性こそ、人生を切り拓いて前進するためには不可欠と言える。小林の内奥をこんな風に読んだとしたら。



鼻の出来ばえと交際交流

片岡義男
(作家)



三日に一度はベルギー・ワッフルの店の前を歩く。いつも行列が出来ていく。つい先日は四十人ほどの行列のなかに、外国の男性がふたりいた。ひとりには三十代、もうひよりは四十代で、ふたりともヨーロッパのどこかの人だった。

マルイのエスカレーターで上がっていく、おなじくヨーロッパの女性を見かけた。駅のすぐ隣にあるチェーン店

のカフェで夕方のひとときを過ごしていたら、くすんだ長めの金髪を細かく丸めた髪、三十代前半のヨーロッパ女性がひとり、コーヒーのマグひとつを持って、僕からひとつ向こうの席にすわった。砂糖の紙スティックの端のちぎりがたや、スティックのなかの砂糖すべてをマグに入れるときの手つき、さらにはマグのコーヒーをかきまぜるときの、かきませかたなど、まっ

たく意識せずにおこなっているはずの平凡な日常の小さな動作の隅々にまで、めりはりが利いている様子は、観察に値した。

いつもいく別のチェーン店のカフェには、平日の夕方、三人の外国人男性がいた。まだ若いひよりは日本の会社でサラリーマンをしていく風情で、中年のふたりは僕とおなじく無職の人に見えたが、東京の片隅に少なくともいまは、定住して日常を送っている雰囲気だった。

東京で外国の人をたくさん見かける、しかも観光ではなく東京に住んで働いている様子の、ヨーロッパからの人たちを、という内容のコラムを二年前、新聞に書いた。そのときよりも、少しだけだが、明らかに、外国の人は増えている。下北沢まで外出したとき、すれ違う外国の人を数えたら、往きだけで十二人もいた。どの人も、もつとも広い意味でヨーロッパの、地味な仕事と日常の人ばかりだった。

夏の終わり近いある日の午後、別の

場所ではカフエにいたら、僕から通路とテーブルをへて正面に、どこかヨーロッパの、三十代の男性がひとり、席についた。くすんだ金髪を面倒くさくない短さにまとめ、半袖のポロ・シャツにダーク・ブルーのパンツ、そして足音のしている平凡な靴に、例によつて大きくふくらんだバック・バック。

とりたててハンサムではない彼の横顔を、僕はなんの無理もなく真正面に見ることとなった。真横から観察する彼の横顔のなかに、鼻は大きく尖つた三角形として、突き出ていた。顔ぜんたいをいろんな角度から見ていると、鼻はさほど目立たないのだが、真横から観察すると、その鼻はたいそう大きく、なおかつくつきりと尖つて長い三角形で、その突端は彼の顔の前にある空気に、常に突き刺さつていた。

ガラスの容器からスプーンでなにかすくい取つては口に入れ、おだやかに囃んでは、飲み下していた。緑色のものだったから、抹茶なんかではなかつたか。消費エネルギーの少なそう

な彼に、その緑色の食べ物、摂取エネルギーの少なさにおいて、静かに釣り合つていた。

彼のすぐ手前の席には日本の若い女性がついて、彼女の横顔も僕の正面に見えた。彼女の鼻はことさらにぺちゃんこではなく、ごく普通に自信を持つていい鼻だったが、その向こうにいる彼の鼻にくらべると、なきに等しいものだった。

国際交流、という四文字言葉が、僕の頭のなかに浮かんで消えた。おそろしいまでに大きな、長くて鋭角に尖つた三角形の鼻と、それにくらべるならなみに等しい鼻とが、国際という状況において、交流とやらを実行しなくてはいけない。そこに前途があるなら、僕はそれを祝福したい。

自分ひとり、異国のカフエで、おそらくは好物なのだろう、緑色をした柔らかな食べ物を、ヨーロッパからのその男性は、おだやかに慈しんでひとときを過ごした。自分のペース、というものがそこには、存在を主張する

ことはけつしてなかつたけれど、彼そのものとして、確実に存在していた。

食べ終わつた彼は、足もとに置いたバック・バックからティシューのビニール袋を取り出し、一枚を抜き取り、鼻をかんだ。これだけ大きな三角形に尖つた鼻だから、鼻のかみかたにも国際の遠い彼方の、日本にはけつしてないものがあるのではないかと僕は期待した。しかしその期待は期待だけに終わつた。ごく一般的な鼻のかみかたであり、たとえば僕のとくらべて、なんら特別の差異はないのだった。かみ終わつたティシューをたたむところまで、僕とおなじだった。

席を立つた彼が、トレートと食器をリターンに戻し、バック・バックを肩にかけ、ゆつたりと歩いて店を出ていくとき、ウェイトレスのひとりとして違つた。そのときの彼の微笑のしかたとごく軽いなすきかたのなかに、彼にとつては自分そのものである、遠い彼方の彼の国、つまり異国を、僕は見た。

乙未元旦

山西 靖彦



征途讓不知

征途せいと 讓ゆることを知らざれば

羊角觸藩羸

羊角ようかく 藩まがきに触れて羸くろしまん

二退三伸豫

二退三伸を豫たのしみ

須慮慢訑危

須すべらく慢べんたん訑あやうの危おもきを慮おもんばか

今年の干支は乙未（きのとひつじ）なので、年頭に当たり今年も「羊」にちなんで「乙未元旦」と題して漢詩を作ってみた。

羊は古代の中国人には家畜として身近な動物であったようで、羊を部首とする漢字には、「美・義・群」などがある。

また、羊にちなむ故事等も多く、次のようなものがある。

「羊頭狗肉」(羊の頭を看板にかかげておきながら、実は犬の肉を売ること)

「羊質虎皮」(外見が立派でも、実質が伴っていない見かけ倒しの喩え)

「多岐亡羊」(羊が逃げたので楊子の家の者たちが探しに行ったが、枝道が多くて見失って帰ってきた。それを聞いた楊子が、学問の道も同様で真理をつかむのに苦しむと嘆いた故事)

「亡羊補牢」(羊に逃げられてから囲いを補修すること、過ちを改めることにまだ遅くないこと)

今回用いたのは、「易」にある「大